

「死」とその周辺——実篤・漱石・直哉——

松井貴子

(1) 死を扱った作品

武者小路実篤の短編「死」⁽¹⁾は、実篤の兄公共の最初の妻方子（かずこ）の死を素材とした作品である。万子は、公爵毛利元徳の六女で、明治三十八年三月に結婚、芳子と実光の二人の子を産んだ。作中では「K子」として登場する。他の人々がほとんど実名で出てくる中で、実名を出さないのは、万子の実家をはばかっていることであろう。姪の死を扱った「芳子」でも同様である。三人目の子供を身ごもった時、悪阻の悪化のため、大正三年七月七日に亡くなった。「死」の連載開始は八月十二日である。

実篤には死を扱った作品が、他にも数編ある。実篤の家では、父実世が結核のため三十五才で病没し（当時実篤は二才）、また母の秋子は八人の子供を産んだが、長子は死産、

第二子から第五子までは夭折した。（これは、実世がベルリ
ンから持ち帰った病気によるものらしい。）⁽²⁾

第六、八子の伊嘉子、公共、実篤の三人だけが成長した。
しかし、伊嘉子と実篤は病弱であり、伊嘉子の方は、明治三十二年に、二十歳で父と同じ肺結核で没した。この姉の死を扱った作品が「姉」（回想断片）である。また、姪の芳子は明治四十一年一月二十六日に生まれて、九月七日に死亡しており、実篤は、公共の代わりに喪主を勤めた。他に、友人の葬式を書いた「西幸熊」がある。

死を扱った作品は、単行本『死』（大正3年12月 千章館）に、まとめて収録されているが、死をテーマに、いくつもの作品を書いていること背景には、実際に、家庭内であった死が、実篤にとって、それだけ身近なものであったことに加え、自身も病弱であったことから、死への不安、恐怖、長じ

ては、死への抵抗、生への欲求となる内面的なものがあつたと思われる。実篤は、これ以外にも、たびたび死に言及している。⁽³⁾

『死』の自序に、

「『死』と『芳子』を本文と見てもらひたい。」

とある。両作品に共通する点の一つとして、「縁起かつぎ」が考えられる。具体的に本文を見てみると、例えば、物事を不吉に受け止めることは、

「嫂が芳子をつれて病院に入つた時のことだ、嫂は病院に近づくに従つてなんとなくいやな気がして、淋しい気がして、芳子を奪はれにゆくやうな気がしてしかたがない。」「どうしてか病院に近づくに従つて胸さわぎがして、芳子を奪はれるやうな気がする。」（「芳子」）

という部分と、

「『病室は知つてゐるか』と聞くから、『知らない』と云つたら『一番奥の東側の四番だ』と云つた。四と云ふ数はよくない数だと思つた。『芳子の死んだ室の隣ですか』と自分は一種の恐迫観念から聞きたかつたけれどやめた。其時芳子が死んだ時兄が上海に行つてゐたことに気がつかかなかつた。」

（「死」）

という部分に見られる。

また、不吉な予感を感じながらも、それを打ち消そうとす

る心持ちは、

「母が『今朝胸さわぎがして』しかたがないので心配してゐたら、今朝芳子に熱があると電話がかゝつたので心配で／＼しかたがない」と云ふ。

自分も之を聞いたとき、いゝ気がしなかつた。しかし虫の知らせと云ふものは当る時もあるかも知れないがあたらない時の方が多いから。

『心配なことはいでせう』と云つた。（「芳子」）
という部分と、

「赤十字病院と聞くと自分はすぐ死んだ芳子のことを思ひ出す。芳子は嫂の長女で生れて九月目に赤十字病院で死んだ。芳子の死んだ室に嫂は入院してはしないかと云ふ氣さへした。さうしてさうでなければいゝがと思つた。自分は自分のつまらぬ縁起をかつぐのを笑つた。さうして神経質なのに似あはずさう云ふことは無いものだときめてゐる嫂に感心した。さう云ふ事はないにきまつてゐると自分も意識的に思つた。」

嫂には芳子の外に芳子の弟で今年五つになる実光と云ふ男の子がある。丈夫に育つてゐる。嫂は実光を生む時も赤十字病院に入つたのだつた。その時も母や自分は私かに縁起を気にしたが嫂は平氣だつた。（「死」）
という部分に見られる。

「姉」と「死」に共通するのは夢である。実篤にとって夢は、

「神聖」に思うことさえある、意味のあるものであった。⁽⁴⁾
「姉」や「死」よりも前に書かれた「姉の死」(「記憶のきれん」)大正2年3月「白樺」)には、

「或夜、姉と自家の長屋にゐるた女の子とが幽霊になつて自分に逢ひに来た夢を見た。自分は目が覚めてから気がわるくつて仕方がなかつた。心細い気がして仕方がなかつた。」という夢の経験をし、それが、逆夢か正夢か、氣をもんだ挙句、姉が死んでしまったことが書かれている。それをふまえて、「死」では、

「自分は夢を黙つてゐると反て夢が本当になりさうな気がしたので妻にそのことを話した。さうして夢はあてにならないときまりきつたことを氣やすめに云つた。

自分はこの前、自分の本当の姉が死んだ時にもその少し前に姉が幽霊になつて出て来た夢を見た事があつた。それを思ひあはせるといふやな気がした。」と書かれ、さらに「姉」で、同じ夢の話が挿入されるのである。

万子と氣が合い、仲が良かったことは「死」に書かれているが、⁽⁵⁾ 実篤にとつて万子は、実篤が十五才の時に死んだ伊嘉子に代る存在であつたと思われる。

実篤は、死んだ姉に対して何もしてあげられなかつたという心残りがあつたから、⁽⁶⁾ それだけ代りとしての嫂を慕う氣

持ちも強かつたであらう。その嫂までもが死ぬのであるから、心理的動揺は大きく、不安からくる迷信が顔を出してくるのも無理のないことといえる。しかし、実篤の向日的側面が、身内の死を乗り越えさせたのである。

(1) 最初「嫂の死」という題であつたが、兄公共の注意で、嫂の字を取つて「死」とした。(『思い出の人々』昭和41年11月 講談社)

(2) 大津山園夫『武者小路実篤論』昭和49年2月 東京大学出版会

(3) 実篤が大正末までに死について書いた文章には次のようなものがある。

「死」明治44年7月「白樺」―死への不安。

「死の恐怖」明治42年〜大正2年の間に執筆。初出未詳。―

死への抵抗。

「死」大正4年8月「白樺」―死を肯定できない。十分に生きて大往生したい。

「死よ」大正5年2月「白樺」―十分に生きた後、死を受け

入れるであらう。

「偶然者の独言」大正五年一月「科学と文芸」―死を恐れず、生を肯定。

「三つの本能」大正六年三月「文章世界」―自分の死を考えると淋しい。

「へんな原稿（戦にゆく前）」大正8年7月「改造」―死にたくない。本当に生きたい。

「死に克つ為には」大正10年3月中旬の講演―自分の一生が人類の役に立ち本当の生命に触れることができれば死は怖くない。

「人生に就て」大正10年11月の講演―人類には生きたいという本能がある。

「死」大正14年2月「不二」―死ぬことの淋しさは感じなかったが、長生きして自分を生かしたい。

死の恐怖から、自己を生かす、生への欲求へと、実篤の変化がわかる。

(4) 「自分は随分いろ／＼の夢を見る、夢によつて喜びを得たり、恐怖を感じたり不安を感じたりする。自分は神聖だと思ふ夢を今迄は三度は見た。」「夢でもかう云ふ夢になると、簡単な夢でありながら何か深い感じをのこす。大概の現実の経験よりは深く運命に交渉してくる。」（「夢でも」大正4年6月「白樺」）

(5) 「普段は逢ふとなんとか云つて僕のことをからかった。嫂は僕の風評を嫂の兄や嫂に話す時は皆笑ふのだと云つた。嫂は僕を偏人あつかひをした。だが嫂と僕とは馬鹿正直な処や、曲つたことの嫌ひな点で仲がよかつた。

嫂は僕の身体がひよろ長いと云ふので、僕のことを『ひょう六』と云ふから僕は嫂のことを『ぬけ六』と呼返した。二

人はお互に立ち入つた交渉はしなかつた。気持のいゝ時あつさりつきあつて、気持のわるい時は黙つてゐた。だから二人は感情のもつれあつたことは唯の一度もなかつた。」

(6) 「姉」（大正5年5月「白樺」）に、

「姉が生きてゐる内に自分は姉に何に一ついゝことをしなかつた。自分は齢よりも子供だつた。姉の相談には元よりのれなかつた。姉の話相手にもなれなかつた。まして姉の運命に就て働らくことは出来なかつた。」「文学の話は姉の最も好きな話だつたらしい。姉は僕の仕事を喜んでくれたにちがいない。姉の性質は又僕とよくあつたやうにも思ふ。自分は姉のことを思ふと涙ぐむ。死んだのはどうしても心残りだ。」とあり、また、実篤は幼い頃、水死しそうになつたのを助けてもらった命の恩人だと思つていた。

(2) 執筆の経緯、漱石との関わり

「死」は、漱石の推挙によつて、大正三年八月十二日から二十五日まで、十四回にわたつて東京朝日新聞に連載された。これは、漱石の「こころ」が連載された後をうけついで「短篇集」と題するシリーズの一つである。

しかし、漱石は最初から実篤に依頼したわけではない。執筆に至るまでの事情は、『武者小路実篤全集』第九卷（昭和30年6月 新潮社）の「後書き」に簡潔にまとめられている。

この巻は、実篤の初期の短編をあつめたもので、「死」は事実そのままを書いた作品群に属する。実篤は各作品についてコメントを加えているが、その中で「死」についての部分は、次のように書かれている。

「『死』は夏目（漱石）さんにすゝめられて朝日にかいたもので、一番始めにまとまつた金を得た作だ。志賀（直哉）が夏目さんにたのまれて長篇をかくわけだったが、いよいよと言ふ時に気がすゝまないでかけないと断つたので、夏目さんがあわてゝいろいろの人に十四五回で終る位の長さのものをかかず計画をたて、その一人に僕も里見弴と共に選ばれたわけだ。

夏目さんに逢つた時、『志賀に断られて困つたが、結婚約束をしても嫌ひになつたものに無理に結婚しろとも言へないからね』と言ふ意味の事を言はれたことを今でも覚えてゐる。

志賀の文学的良心には厚意を持つても、断られた事には困つたのは事実と思ふが、その為にこの小説は出来たやうな結果になつたわけだ。志賀のその作はその時にかかなかつた代り『暗夜行路』が今の形で残つたわけである。」

漱石は最初、朝日新聞に短編ではなく長編を載せるつもりで、志賀直哉に依頼したが、直哉は執筆を断念したため、代りに短編を数人の作家⁽¹⁾に依頼したのである。このことは「或る男」にも書かれている。⁽²⁾この時完成しなかつた直哉の原

稿は、「暗夜行路草稿20」と推定されている。⁽³⁾

執筆の依頼から断念への流れは、書簡から、うかがい知ることが出来る。

大正二年十二月二十七日付の直哉宛実篤書簡に、

「夏目さんからの手紙に君に都合のいゝ時朝日新聞の小説をかいてもらうやうにたのんでくれと丁寧にかいてあつた。くわしくはあつた時に話すけれど、

『今度機会があつたらどうぞ私の希望を志賀君に通じておいて下さい』とかいてある。」とあり、漱石は実篤を介して、直哉に依頼したことがわかる。実篤はこの連載を、

「自分もすゝめたい気がしてゐる。毎日々々新聞に強いられるのにはいやなことがあるかも知れないが、ゲーテが自分のものゝ出版の予告をさせておいてそれを刺戟にして注意を集中するやうなやり方もいゝことがあるやうな気がする。」

と、直哉にすすめている。直哉がすぐに連載をひきうけ、漱石に手紙を出したことは、

「武者小路君を通して御依頼した事につき御承諾の意を御洩し被下まして難有存じます」という文面の、十二月三十一日付の直哉宛漱石書簡から知られる。漱石はさらに、翌年四月二十九日付で、丁寧に、

「小説は私がかかじめ拝見する必要はないだらうと思ひます。夫から漢字のかなは訓読音読どちらにしていゝか他のも

のに分らない事が多いからつけて下さい。夫でないとは却つてあなたの神経にさわる事が出来ませう。尤も社にはルビ付の活字があるからワウオフだとか普通の人の区別の出来にくいものはい、加減につけて置くと活版が天然に直してくれませう。」と書き送っている。

「或る男」によると、実篤は「死」の中の語句を訂正するために、漱石に一、二度会っている。直哉については、作品の手直しをする必要が全くないと、認めているのであるから、破格の待遇である。実篤は、漱石の手紙の書き方に、少しも不快感を感じなかったようであるが、先の、十二月三十一日付の直哉宛書簡にも、そのような漱石の態度、気配りが感じられる。⁽⁴⁾

しかし、直哉は長編を仕上げることができず、結局連載を断った。それに対して漱石は七月十三日付で、

「御書拝見 どうしても書け⁽⁷⁾などの仰せ残念ですが已を得ない事と思ひます 社の方へはさう云つてやりました、あとは極りませんが何うかなるでせう 御心配には及びませぬ、他あなたの得意なものが出来たら其代り外へやらずに此方へ下さい 先は右迄 匆々」

と短い返事をしている。漱石にしてみれば、直哉を信頼し、かなり気をつかって原稿を頼んだにもかかわらず、裏切られてしまったのだが、文面上では言葉を荒だてることなく、う

けいれ、さらには次の作品掲載の約束までしている。

直哉自身は、連載を断ったことについて、直後には、「例の長篇は心持の上の都合でどうしても書けなくなつたので御約束をした夏目先生には悪い事でしたがヤメル事にしました、それで漸く落ちつきました、」(大正3年8月16日付 和辻哲郎宛書簡)

と述べ、また、後には、

「夏目さんから新聞の続き物は豆腐のブツ切りでは困ると云はれ、さういはれたら書けなくなつたよ。一回毎に多少の山をつくり、多少の謎をもたせると云ふ事は出来なかつた。他の書けない理由もあつて、到頭書けずに断つたよ。」(長与善郎との対談「時の問題を交換する」昭和13年5月25日〜28日「読売新聞」)と述べている。

長編作品を書くこと自体に対する精神的プレッシャーと自分の満足のいく仕上がりにならない苛立ちがあつたことが読みとれる。そのような精神状態、新聞での連載という執筆時間⁽⁸⁾に追われることが目に見えている状況で作品を完成させていくことは、とても無理であると判断したにちがいない。長編のかわりに、短編を次々に連続して書くという器用さは、寡作の直哉には、望むべくもなかつたであろう。

周囲に及ぼした迷惑ということを除外すれば、直哉の、作

品に対する潔癖さ、連載に穴をあげないためというような、一種の売文業的理由で、納得のいかない作品を公表することを許さない、妥協できない、きびしい姿勢によって決意された行為であると、評価することができるかもしれない。

ところで、漱石との関わりは直哉よりも実篤の方が深く、後年、実篤はくり返し漱石について書いている。

漱石と実篤との関わりで、最初のかなめとされているのが、「白樺」創刊号（明治43年4月）の巻頭に載せられた「『それから』に就て」である。⁽⁶⁾この作品評に対し、漱石は礼状を出すと共に、翌月には実篤に原稿を依頼している。⁽⁷⁾

実篤が漱石について書いたものには、

「或る男」（大正10年から執筆開始）

「夏目さんの手紙」（大正6年2月「新公論」）

「漱石全集刊行会版『漱石全集』内容見本（昭和3年）に載せた文章」

「夏目さん」（創芸社版『夏目漱石全集』内容見本 昭和28年）

「漱石の魅力」（角川書店版『夏目漱石全集』内容見本 昭和35年）

などがあるが、そこで述べられているのは、おおよそ、

○最も尊敬でき、また、世話になった先輩。人格者。

○人生、芸術についての深い思索と議論。

○小説の書き方、実篤の言う「写実主義」に対する批判の三点が主である。漱石を人格者と認めさせた理由の一つとして、大正四年六月十五日付の実篤宛漱石書簡中の、

「武者小路さん。気に入らない事、癪に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く沢山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりもそれをゆるす事が人間として立派なものならば、出来る丈そちらの方の修養をお互にしたいと思ひますがどうでせう。」

という助言が、考えられる。

実篤と漱石については、実篤を漱石の思想的・文学的継承者とする説⁽⁸⁾と両者の資質の違いを指摘する説⁽⁹⁾があり、また、実篤の漱石への愛着、漱石との内的関連についての問題提起⁽¹⁰⁾がなされている。

実篤の漱石に対する評価は両面的である。尊敬し、恩も感じていなければならない点も、完全に信奉しているわけではない。漱石に同調できない点が、小説家にとって根幹的な部分に関わる小説の書き方、技法なのである。もっとも、実篤にとっては文章を書くことが第一義ではなく、究極の目標は自己を生かすことで、文筆はそのための一つの手段であったともいえる。しかし、自己を生かし、人生を完成させることに執念を持ちつづけた実篤であったから、それにつながる文筆の仕事は少しもおろそかにできるものではなく、自身の方法を固

持し、漱石の方法に批判を加えることも辞さない姿勢も納得できる。漱石を「大きな人格者」と評したのも、もちろん実際にそう感じたからであるが、「小説の方法が異なっても、受容し、すぐれたものは認めてくれる人格者、漱石」とすることで、自身の方法を、漱石にも認められたものとして自ら擁護しようとする意図も含まれていたのではないかと思われる。

(1) 里見弴も、その一人で、十一月二十三日から「母と子」を連載し、初めて原稿料を得た。(『年譜』『里見弴全集』第十卷 昭和54年4月 筑摩書房)

(2) 「或る男」の本文を引用しておく。

「彼はその後まもなく夏目さんから手紙をもらった。それには志賀が『朝日』に長篇をかくことになつてゐたのが、不意にかけなくなつたのでそのかはり、十人位ゐる人に短編を書いてもらつて、つゞけて出したいと思つてゐる。よかつたら彼と里見にかいてほしいと云ふのだつた。彼はすぐ手紙を持つてその時分東京に帰つてゐた里見に逢ひに出かけた。里見もかく氣になつた。それで彼は承知した意味の手紙をかけた。

夏目さんは志賀を尊敬してゐた。その事は短い文章で『朝日』に夏目さんがかいてゐた。その文章は全集にはのつてゐないやうに思ふが、尊敬する意味がかいてあつた。志賀の方

では勿論夏目さんを尊敬してゐる。

それで夏目さんが志賀にかくことをたのんだのだが、志賀が途中までかいていやになつたので、やめることになつたのだつた。

彼はそれで嫂の死をかいた。十三回で終るやうにと云う註文だつたが、彼は十六回位ゐになりさうなので、そのことを夏目さんに書いて十六回になつてもいいかと云つたら、それでは他の人の關係上困ると云ふので、彼は十四回にぢぢめた。しかしわりに要領よくぢぢめられたから反つて十四回でよかつたかも知れない。彼は夏目さんの気持や、手紙のかき方で、少しも不快を受けずにすんだ。

その小説が原因で彼は夏目さんに二度か二度あつた。それは小説のなかの文句をかきなほすためだつた。」

(3) 「後記」(『志賀直哉全集』第六卷 昭和48年8月 岩波書店)

(4) 書簡の後半に

「夫に就てわざ／＼会見の日取を御問合せになりましたが私の方は今いつが空いてゐるといふ程多忙の身体でもありませんからあなたの方で極めて一寸御通知を願ひたいと思ひます若し私の方で都合が悪ければ其時申上ますから 御宅と私の家とは大変かけ隔つてゐて御氣の毒です。」

とある。

(5) 佐藤泰正「漱石と実篤」(『月報1』『武者小路実篤全集』

昭和62年11月 小学館)

また西垣勤氏は、漱石と白樺の關係を「『それから』を読
んで、我が家庭、我がことが書かれていると感じたという関
係だった」としている。(『漱石と白樺派』平成2年6月
有精堂)

(6) 明治43年3月30日付実篤宛漱石書簡(はがき)

謝辞の他、「それから」評に、すぐ目を通したことが、実篤の
評が的を射たものであることが書かれている。

(7) 明治43年4〜6月と大正元年の漱石書簡に、実篤の原稿の事
が書かれている。

4月6日 「代助と良平」頂戴難有候都合次第掲載可致候
間しばらく御猶予願上候。

4月11日 あの文句を玉稿中に挿入する事はどこかツギの
出来る様な気がして、どうも旨く行きませんから已めまし
た。

5月2日 玉稿はたしかに入手致しました。都合つき次第
掲載致します。毎度御迷惑をかけて済みません此後も時々願
ひます。

6月5日 尊稿正に落掌致し候。あれで宜しいと思ひま
す。たゞ全局に涉つての議論になると、あゝばかりも行くま
いと思ひます。今少し原稿がたまつてゐますから少し後れま
すから其積に願ひます。少し位時日が経過しても腐る種でな
いから構はないでせう。毎々難有存じます。

大正元年11月15日 今度大阪の社の方で新進作家の小説を

日曜附録へ(長さ新聞にて一頁)載せたま由にてあなたにも
一つ願つて見てくれと申します。どうか御繁多中恐縮ですが
書いてやつて下さいませんか。

漱石が実篤の原稿を見ること、実篤は、縮切に遅れず、原
稿を送っていたことが推測される。

(8) 角川源義『武者小路実篤集解説』(日本近代文学大系 第三

十二巻『倉田百三・武者小路実篤集』昭和48年1月 角川書
店)

(9) 佐藤泰正『漱石と実篤』

(10) 紅野敏郎『解説』(『武者小路実篤全集』第三巻 昭和63年

4月 小学館)

(3) 或る男、其姉の死

「死」に関連して、気になる作品がある。志賀直哉の「或
る男、其姉の死」である。この作品は、大正九年一月六日か
ら三月二十八日まで大阪毎日新聞夕刊に連載された。

細川書店版『或る男、其姉の死』の「あとがき」(昭和21
年)で、作者自ら、父と子の不和を弟の視点から書いたもの
で、姉という架空の人物を設定したと語っている。兄と姉が
いる弟というのは、姉の伊嘉子、兄の公共がいる実篤と同じ
である。直哉は、主人公を自分の実生活に似た世界に置かず、

実篤の立場を借りて描いたと思われる。

この作品の、最も直接的な草稿である「或る男と其姉の死」は、大正三年二月十五日、漱石が実篤を介して直哉に執筆依頼をした時期、すなわち「死」が書かれる以前に執筆されている。⁽¹⁾

直哉は実篤の作品に敬意を持ち⁽²⁾、「死」より前、明治四十一年に書かれた「芳子」について、「白樺」(明治44年11月)に掲載されるやいなや感想を記している。⁽³⁾ 作品として文章をまとめあげる能力は、直哉よりも実篤の方が早く發揮しており、直哉は習作や草稿を書きながら、実篤の作品を見ていたわけである。自分がまだ小説を書く方法を模索していると思っている時期に、年下の友人が「完成品」として作品をいくつもまとめていたのである。直哉は先を越されているという思いの中、実篤の作品を意識せざるをえない状態であったであろう。

時期的には、「或る男、其姉の死」の草稿と初出の間に「死」が入るが、直哉は「死」と共に、その先行作品ともいえる「芳子」も視野に入れて「或る男、其姉の死」を作品に仕上げた可能性が感じられる。「或る男、其姉の死」における設定のうち、必然性が感じられないものに、実篤の作品から借りたと思われるものがあるからである。

まず、登場人物の名前が、兄「芳行」、弟「芳三」となっ

ている点である。兄の「行」弟の「三」という字は、直哉の死んだ兄が「直行」、異母弟が「直三」であることに由来するのであるが、「直」の字を使わず、実篤の姪「芳子」(実名で作品に登場する)の「芳」の字を使っている。また、「芳子」では、芳子の目のわきと手に生まれつきあざがあったが、芳行と芳三の姉にも耳のわきにあざがあることになっている。以上の二点が、「芳子」との類似点である。

実篤の嫂万子は、悪阻の悪化のため赤十字病院で亡くなった。「或る男、其姉の死」の姉も同じ病気である。⁽⁴⁾ この姉は入院せず、家で寝かされているが、その状態を描写する際に、わざわざ「赤十字病院」に言及している。⁽⁵⁾

病人が寝ている様子を、「死」⁽⁶⁾と「或る男、其姉の死」の「草稿」⁽⁷⁾、「定稿」⁽⁸⁾、それぞれの場面で比較してみると、「草稿」の段階で、既に「架空の姉」は設定されているが、その描かれ方は、肉親というよりも対象物として書かれているという感じがする。加えて言えば、この草稿の段階では、「赤十字病院」「悪阻から変化した余病」「弟の立場」のいずれも、書かれていない。「死」以後の、大正八年六月以降書かれたと推定される草稿に「私はこれから九年目に見た兄の事を御話ししやうと思ひます。」と、語り手として弟が登場する。「定稿」と「死」を比べてみると、語り手が病人の様子を描写している点、病人と語り手以外の者が、病人

の死後のことを話すのを聞いた感想を述べる点で、似ているという印象をうける。

直哉は実生活では姉を持たないために、実篤の書いたものを参考にしたのではないかと思われる。直哉が、実篤に影響を受けているということの一つであろう。

しかし、直哉自身の言う、実篤との「性格や素質の差」は、やはり、この作品にも現われているようである。同じ死の床にある嫂（姉）を描きながら、実篤の方は嫂に美しさ、神々しさを見ているのに対し、直哉は醜さ、恐ろしさを感じるのみである。そして、実篤が客観的描写を主としているのに対し、直哉は死に近づきつつある者を目前にした自分の感情を表現することに力を入れている。また、死後の相談に対して、実篤は容認する態度を示しているのに対し、直哉は「不愉快」を表明している。直哉は、実篤の作品から人物や場面の設定など、部分的には借りながら、「武者に見せるといふ気持ち」から、異なる視点で、全く別の雰囲気の商品を作りあげているのである。

直哉が連載を断念したのは大正三年であるが、年譜によると、十月に「寓居」を書いた後、大正四年八月に小品「嵐の日」「山の木と大鋸」を書いた以外は、作品の発表を全く中断している。次に作品が出るのは、大正六年四月「佐々木の場合」「城の崎にて」である。この、三年間の沈黙の後の作品

発表を、町田栄氏は「大正六年度の志賀文学復活」とし、実篤をこれに「深く深くかかわった人」と位置づけている。⁽⁹⁾

大正六年五月以後の旺盛な創作は、大正十年からの『暗夜行路』発表につながっていくのである。この動機の一つとして、実篤の存在があったことが、「或る男、其姉の死」の中にも現われているといえよう。

(1) 滝井孝作は、「或る男と其姉の死」(十二枚の短編)がすぐに発表されなかった理由を「姉の死といふのが祖母上の臨終を指定されたもののやうで、それで、すぐ発表はされずに筐底に蔵せられたものと、私は思ふ。」としている。「志賀さんの生活」昭和48年5〜6月「東京新聞」『滝井孝作全集』第十巻 昭和54年6月中央公論社)

(2) 直哉は、後年の回想で、

「私は中学時代から小説を読み、小説が好きで、小説家になる決心をしたが、書く要領が飲込めず、書いても書いてもものにならなかつた。文学をやる決心をした点では私は武者よりも二年程先輩であるが、私が未だ何も書けない明治四十一年の春、武者は「荒野」といふ単行本を出版してゐる。小説、戯曲、詩、感想などを集めたものだ。さういふ意味では武者は私よりも何年かの先輩といつてよく、性格や素質には随分異つた所がありながら、矢張り私は武者の影響を受けてゐる。性格や素質の差は作品にも最初から現はれてゐたが、

武者に見せるといふ気持から、私は知らず知らず一生懸命に書いてゐた。」（「武者小路と私」昭和36年 『志賀直哉全集』第七卷 昭和49年1月 岩波書店）

と述べている。

(3) 明治44年11月4日付 実篤宛直哉書簡（未投函）

「『芳子』を見ながら所々で随分笑つた。涙を誘はれながら笑つた所もある。十二三歳の小供の話を聞く時のやうな気がした。かういつたばかりぢやホメたのか悪口かわカルまいが、ホメてるのだ。

それからよくも〜芳子といふ赤坊にベツタリとベタツイて書かれたものだともこれも感心した。

先もたしかに読むだ事があつたが、近頃の自分の要求が變つて来たので見方も變つて来たのだと思ふ。」

(4) 「死」に「嫂が赤十字病院に入ったと云ふ事を聞いた。」

「嫂の病気の悪阻だと云ふこと」とあり、「或る男、其姉の死」では、「姉の病気は悪阻から變化した余病のやうですが、はつきりした事はわかりませんでした。今は医者にも見せて居ないのです。そして燈心灸といふのをやる隣村の提灯屋に毎日来て貰つてゐると云ふ話でした。」となつてゐる。

(5) 「赤坂の赤十字病院」とあるが、実際には赤十字病院は当時の赤坂区にはない。

(6) 「嫂は動かない目を見開いてゐた、さうして骨と皮の手を時々動かして何か小さい声で云つた。聞きなれたものがそれ

を通弁した。さうして顔の向きをかへたり、水囊の位置をかへたりした。自分は始め嫂の顔を見た時恐ろしかった。見るのに耐へない気がした。だが見なれるに従つて、静かにしてゐる時の嫂の顔は美しいものになつた。輪廓が鮮かだつた。

其処には恐ろしい静かさ、神々しいあるものがあつた。最も美しい臨終の人の顔の画よりも、もつと美しい気がした。その内には永遠につたへていゝ美があると思つた。自分は兄にさう云つて自分の友達の画家に来てもらつて嫂の顔をスケッチしてもらつたらと思つた。だがさう云ふ不吉なことを云ひ出す気にはなれなかつた。」「嫂の棺や、墓地や、葬式の相談は皆の間に公然と行はれた。さうしてそれが不思議なこと、は思へなかつた。」（「死」）

(7) 「而して彼は十五年ぶり、彼の一人の姉の將に死なうとしてゐる姿を見たのである。

『これで生きてるのかしら？』と彼は思つた。すゝけた、だゞつ広い部屋の隅に小さな屏風で仕切られた病床に年をとつた女が瘠せきつて眼をつぶつたまゝ、仰向けに寝てゐた。夕暗みの中に只ジツと眠つてゐる病人は全く生きてゐるか死んでゐるか解からなかつた。此病人は實際昨日一度死んだのであつた。一度息が絶えたのである。皆そのつもりで既に葬式の支度にかゝつた。所が一時間して実は未だカスカな息をしてゐた事に気がつかれたのであつた。」（「或る男と其姉の死」）

「姉の床は広い部屋の黒光りのする大きな板戸の前へ片寄せ
てとつてありました。姉は仰向けに眼をつぶつて寝てゐまし
た。掛けた蒲団が薄い所に身体も骨と皮ばかりになつてゐる
為めか、上が平べつたく低く見えてゐるのが、一寸死人が寝
てゐる時のやうな気がしました。」

兄は傍へ坐つて黙つてその顔を覗き込んでゐましたが、姉
にはまるで意識はない風でした。落ち窪んだ眼や、半分は垢
かと思ふ色艶の悪いカサ／＼した皮膚とかを見ると私は堪ら
ない気持になりました。人の一生がこんなにして終らねばな
らぬといふ事は恐ろしい以上、物凄いい感じがしました。死ん
で了へばどういふ死も結局は同じであるとしても、此場合す
すけた変に広い部屋に暗い釣洋燈が一つ、そして見るもの何
一つ華やかな色もなく、姑と良人との心持にももう色も温か
みもないやうな感じから、私には此光景が既に黄泉のやうに
感じられたのです。私は若しも同じ死の床を赤坂の赤十字病
院の病室のやうな所で見出したとすれば死の恐ろしさを此半
分にも感じなかつたかも知れません。色々な草花、白い壁、
白いシイツ、死別に泣く人々、そんなものが、まだしも其恐
れを和げて呉れるのです。所が此所では何一つさう云ふもの
はありません。私は無限の闇に落ちて／＼行く、丁度寝つき
にどうかするとさう云ふ気持になる、それに似た死の恐れを
感じたのです。鳥が啼いたり、虫が飛んだり、日が照つた
り、風が吹いたり、花が咲いたり、犬が駆けたり、子供が騒

いだりする明日のある事がどうしても頭に浮んで来ませんで
した。死が永遠の闇なら人生は高原での寒い日の薄暮といふ
やうな気がしたのです。少くも姉にはそれは實際さうだつた
云ふ気がして来たのです。「私は姑や義兄の話ぶりが幾ら
意識が不明であるとしても、其本人を前にして云ふには余り
に傷々しい事を平気で云ふには閉口しました。そして余りに
執着なく死を決め込んでゐるのが不愉快でした。」（「或る
男、其姉の死」）

(9) 『月報7』『武者小路実篤全集』第七卷 昭和63年12月 小
学館

(4) 同じ材料を用いた文章

里見弴は、実篤は精力的に文筆活動をするが、「ネタはい
つも同じだね」（『月報11』『武者小路実篤全集』第十一卷
平成元年8月 小学館）と評したという。同じ材料を使って、
別々の文章を書くことは実篤に特徴的である。これを嫂万子、
姪芳子、姉伊嘉子を書いた文章について見てみたい。

伊嘉子の死については、父実世の死も含めて、

「姉の死」（「記憶のきれ／＼」大正2年3月「白樺」）

「姉（回想断片）」（大正5年5月「白樺」）

詩「父と姉の死」（大正15年12月）

という、三編の作品になつてゐる。

「姉の死」の中心的内容は、「姉が幽霊となつて夢に出てきたこと」「病気の姉に、表紙に頭蓋骨の絵が書かれた本を送つてしまつたこと」である。

「姉」では、「夢」の話、「本」の話は、「姉の死」のときの殆ど程度⁽¹⁾の長さに縮められて、最後の方に入れられている。「姉」では、この二つ⁽²⁾の話以外に「夭折した兄弟たち」

「姉の名の由来」「姉との写真」「迷子になつたこと」「おぼれかけたこと」「姉の琴」「人相見の予言」「姉の嫁入りのこと」など、多くの内容が加えられている。しかし「回想断片」とつけられ、前作と重複する内容が最後にあつて印象が強くなるので、重複しない部分の方が多いにもかかわらず、いかにも同じ内容と同じ方針で、くり返して書いていると感じられる。

詩では、題を見ると、また同じかという印象をうけるが、内容は実篤自身の死生観、人間の生命は死の神には勝てないが、生き残つた者の内に生き続けるといふことが主たるテーマであり、⁽³⁾さすがに時の経過による熟成がある。

伊嘉子に関する作品には、姉にもっと長く生きてほしかつたという実篤の思いが、共通してこめられている。

「芳子」は、明治四十一年九月十日と二十三日に執筆された。同じ時期に記されたという実篤日記があり、四月二十一日から九月二十三日の間の記事が作品と重複する。日記の記

事としてそのまま引用された形になっているのが、四月二十一と二十八日、七月二十一と二十二日、九月二と三日、引用した上に補足した形になっているのが、七月二十六日、九月四と五日の分である。「芳子」の前半部分では、実篤の日記が切り貼りされている。⁽⁴⁾後半になると、露骨なほめこみは影をひそめる。芳子が死ぬ直前の九月六と七日の記事は、日記よりも内容をふくらませ、特に芳子の臨終の様子は詳細に補足して書かれている。芳子の死後も、日記には母や姉など芳子に関連する記事が見られるが、九月十日からは「芳子」と日記が同時に書かれているためか、日記に記した内容は、作品の一部分として、うまく溶け込んでいる。ここでは日記をそのまま引用しないかわりに、母と嫂宛の兄からの手紙を引用している。作品と日記の同時進行に疲れたのか、「芳子」の執筆が終わりに近づいた九月二十一日には「この頃は日記を書くのがいやだ」とある。この日記は『彼の青年時代』(大正12年2月)に「一九〇八年の日記」として収録された。

作品の前半は日記の引用部分が多いので、日記をそのまま小説にしたという印象をうける。材料としての日記の使い方がぎこちなく、技術的に未熟で、手抜きをして書いているのではないかというような感じさえする。日記をもとに作品を書くこと自体はそれほど珍しいことではないと思われるが、作品のもとになった日記さえも、作品の一つとして公開して

しまうのが実篤なのである。

嫂の死について書かれた文章は、まず、大正三年七月七日付の直哉宛書簡がある。七日は万子が死んだ日である。はがきに三〇〇字程書かれた内容は、おおよそ、

○嫂の脈、カンフル注射のあと、四度許りの危篤

○神経質、正直な兄嫁の性質

○公共、実光の様子

の三点である。

次は、大正三年八月一日発行の「白樺」の「編輯室にて」にある六〇〇字程の文章で、書かれていることは、

○「芳子」、赤十字病院の病室

○嫂の性質

○嫂の死に目、死顔

○実篤の自然観⁽³⁾

の四点にまとめられる。「死」は、この約十日後から連載が始まる。直哉が朝日新聞への連載を断ったのは遅くとも七月初めと推測されるので、実篤は「死」を書きながら、あるいは「死」の執筆意図をもって、以上の二つの文章を書いたのではないかと思われる。

直哉宛書簡に書かれた「公共、実光の様子」と「編輯室にて」に書かれた「自然観」を除いて、他の内容はすべて「死」の中に、より詳しく、あるいは具体的な記述となつて、はめ

込まれている。

実篤作品の読者は、「白樺」と朝日新聞の両方の文章を目にしたに違いない。「編輯室にて」が書かれていることで、「死」が、フィクションではなく、実篤の家庭内の事実に基づいたものであるということが、作品全体を読まなくてもわかる。「編輯室にて」は、朝日新聞に連載予定の短編「死」の、私的な（自分たちの雑誌に載せたという意味で）予告編であったと位置づけたい。

芸術社版の『武者小路実篤全集』第五卷（大正12年6月）の「序」によると、実篤自身は自分の書く文章について、明確にジャンルを区分して書くことに重きを置かず、読者にも文章の種類ということを気にせず読んでほしいと求めている。

実篤は、何か書きたいものがある時、文章の形式にはこだわらず、とりあえず、その時の自分が書きたい形で書きとめておき、別の機会があれば、その時に応じて、別の形の文章に作品化するというやり方で執筆を続けたのではないだろうか。彼は原稿を依頼されると、それを断るのに要する時間の内に書きあげてしまうというほど速筆、多筆であったという。そのため、結果的に同じ材料を使ってしまうということになるであろう。くり返し書くうちに、描写が詳しくなり、内容に拡がりが出てくる一方、説明的要素が増え、内容的深まりが感じられないこともある。しかし実篤は、事実を書くこ

とについては、それによって、より物事の真相に触れ、実感した事が内容的に濃くなるという理想を持っていた。死について何度も書くことで、実篤は、死の意味について考えを深め、自分を生かすこと、生への欲求を強めていったのである。

(1) 大正三年以降の実篤について、大津山国夫氏は「愛と連帯の時代」と位置づけ、「死」「姉」とともに、「他者の不幸な運命にたいするパセティックな共感をモチーフとした作品」と評している。(『武者小路実篤論』)

(2) 「芳子」における日記の使用について大津山氏は、次のように述べている。

「真理よりも親を愛し、主義よりも家を愛そうという私の精神の復権、および、富者もまた生きる権利があるという富者の復権によって、『芳子』は支えられている。私的な日記を無遠慮につなぎあわせてこの小説が構成されているのも、そういう意味あいからであった。」(同上)

(3) 実篤の「自然」について、大津山氏は、漱石が自然によって我執を断罪するのに対し、実篤は我執を救済しようとするという差異を認めつつ、実篤を漱石の自然に最も近い継承者としている。(同上)